リチャード・ノイトラの建築観と日本

RICHARD NEUTRA'S ARCHITECTURAL THOUGHT AND JAPAN

玉田 浩之*
Hiroyuki TAMADA

This paper aims at an investigation of the relationship between Richard Neutra and Japan. At first, this study focuses on the intersection between Vienna and Japan, emphasizing of Japonisme in Vienna. Secondly, this study examines Neutra's interest by making clear what he has found in Japan. Finally, this study analyzes how Japan affected Neutra's architectural thought. As a result of these analyses, this paper reveals that he emphasized the significance of Japanese traditional houses, landscape and gardens. He especially has learned from a view of nature and other traditional aspects of Japan. This paper points out that Japan played some important roles on his architectural theory.

Keywords: Richard Neutra, Japan, Vienna, Japonisme, modernism, regionalism

リチャード・ノイトラ、日本、ウィーン、ジャポニスム、モダニズム、地域主義

1. はじめに

近代建築運動史においてリチャード・ジョセフ・ノイトラ (Richard Josef Neutra, 1892-1970) は欧州のモダニズム建築をアメリカで早期に実現した人物として評される。こうしたノイトラへの注目の多くは1932年のニューヨーク近代美術館 (MoMA) にて行われた「近代建築：国際展覧会」に基づいている¹。しかしその後、1982年にノイトラの詳細な評伝が出版されたこと、同年 MoMA において展覧会が開催されたことにより、アメリカのモダニズム建築の先駆者でありながら、カリフォルニアの地域的な近代建築の発展に重要な貢献をした人物として再評価が進められた²。近年では、欧州出身のモダニズムの建築家という位置づけのみでは捉えきれない彼の建築観の特異性が注目されつつあり³、とりわけ近代アメリカ建築における地域主義者としての評価が高まっている⁴。

本稿は、これまであまり注目されることのなかったノイトラの日本に対する理解を通して、欧州のモダニズムの文脈からだけでは捉えきれない彼の建築観を明らかにしようとするものである⁵。このことは、アメリカにおけるモダニズム展開期の地域主義を評価し直すことにもつながる論点を含んでおり、注目に値する。ノイトラは1930年に初来日を果たし、その後1951年と1952年にも来日し、講演を行う

と同時に各地を歴訪している。初来日以降ノイトラは再三日本について言及しているだけでなく、積極的に日本を評価し、「日本に学んでいる」と述べていることから、日本訪問は彼の建築観の形成において重要な意味を持ちえたと考えられる。したがって、ノイトラが具体的に日本の何に興味を示し、日本に対してどのような理解を示したのかについて検討することは、彼の建築観を把握するうえで重要であると思われる。

ここでは、ノイトラの建築観を日本との関係において明らかにすることを旨とし、最初の来日を中心として、来日前、来日時、来日後の三つの時期に分けて考察する。ここで三期に分けて考察するのは、ノイトラの日本に関する言説には、初来日に関する言及が多くみられるからである。本稿では、まずは、来日以前のノイトラと日本の接点を考察することにより、日本受容の背景を明らかにする。つぎに、これまで明確にされていなかったノイトラの初来日時の言説と行動を時系列に沿って整理を行う⁶。そして初来日以降、彼が日本に言及した講演内容や論文を検証することによって日本に対する関心の所在を明らかにし、初来日以後にノイトラが展開してきた建築論との関連から彼の日本に対する理解について考察する。

* 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 大学院生・工修

Graduate Student, Graduate School of Science and Technology, Kyoto Institute of Technology, M. Eng.

2. 来日まで：日本受容の背景

まずは、ノイトラの来日までの経歴について概観しておきたい。ノイトラは1892年ウィーンに生まれ、1911年にウィーン工科大学に進学し、大学二年目からアドルフ・ロースの先進的サークルに加わり、大学とサークルの両方から建築を学んでいる。1914年以降の数年間には戦争によって学業の中断を余儀なくされるが、1918年には卒業している。その後チューリッヒの造園家グスタフ・アマンのもとで働きつつ、スイス工科大学で建築家カール・モーザーのクラスに短期間だが学んでいる。そして、彼はベルリンのエーリッヒ・メンデルゾーンの事務所でも働いたのち、1923年にアメリカに移住することになる。渡米後は、シカゴのホラバート・アンド・ローチの事務所やフランク・ロイド・ライトのもとで働き、その後、ロサンゼルスでのルドルフ・シンドラーとの協働を経て1925年に独立する。1930年には、第3回近代建築国際会議（Congrès Internationaux d'Architecture Moderne: CIAM）のアメリカ代表となり、ブリュッセルでの国際会議へ向かう途中で初めて日本を訪れることとなる。

さて、来日以前のノイトラはどのようにして日本に関心を持つようになったのであろうか。その時期は明確に特定することはできないが、当時の状況からその一端をうかがい知ることができる。20世紀の初頭にウィーン工房の主催者ヨーゼフ・ホフマンの事務所に勤め、また、京都の日本インターナショナル建築会の活動を通してノイトラと親交を深めていた上野伊三郎は、ウィーン時代のノイトラについてつぎのように回想している。

「ノイトラがウィーンで属して居たスツルナード、フランクの団体は前述の通り独逸機能主義グループの尖端であって、ノイトラはこのグループから出た最大の天才であり、最も自由な働きをした建築家である。このグループは日本とチャイナの古美術には殊の外に尊敬を払い、殊に日本の古美術を敬服研究していたのである。」⁷

ここでいう独逸機能主義のグループとは、アドルフ・ロースを含む芸術家たちの集団のことである。この証言からノイトラが具体的にどのような活動をしていたかは定かでないが、少なくとも彼の所属していたグループは日本美術を積極的に評価していたことがわかる⁸。したがって、20世紀の初頭にノイトラは日本古美術に関する情報や作品を見聞きしていた可能性がある。

日本美術や工芸、建築を参照した芸術運動はジャポニズムとして知られている。とりわけ19世紀末から20世紀初頭にかけてのウィーンは、ジャポニズムが隆盛を極めた時期であった。このような時代にあつて、ノイトラはロースらのグループに加えて、日本美術に傾倒していた芸術家たち、グスタフ・クリムトやエゴン・シーレと親交を深めていたのである⁹。この学生時代の芸術体験は、ノイトラに影響を与えずにはおかなかったと思われる¹⁰。ノイトラは、この時期に建築的ドローイングとは別に多くのスケッチやデッサンを描いているが、そこには世紀末ウィーンの画家たちの影響が色濃く映し出されている。

1910年代のノイトラのスケッチは退廃的な雰囲気感を漂わせており、その画風はクリムトやシーレのものに近似している。また、金地や無地の背景、図像を平面的に処理する手法などは日本の屏風絵に近い。学生時代に描かれたものを見る限り、ウィーンのジャポニズムとノイトラは無関係ではない（図1～3）。しかしながら学生時代にノイトラは日本美術について言及をしておらず、直接的な影響を示す関連記述を見つけることはできない。したがって、ノイトラのデッサンやスケッチにみられる日本的手法は日本美術への直接的な接触によるものというよりも、むしろジャポニズム影響下のウィーンの画家たちの作品を通して体得したものと考えるのが妥当であると思われる。

ノイトラはウィーンで既に日本美術と出会っていたと考えられるが、直接的に日本美術に触れる機会として明らかなのは、渡米後のフランク・ロイド・ライトの事務所でのことである。ノイトラと同時期にライトの事務所に在籍していた土浦亀城夫妻によれば、ライトの事務所では、週末毎にライトによって収集された浮世絵や日本画の講義が行われていたという¹¹。ライトの事務所であるタリアセンには多数の浮世絵、日本画、ふすま絵が飾られていたことから、ノイトラがライトの浮世絵などの日本美術コレクションを直接目にしていたのは確実である¹²。また、後述するように、来日時のノイトラは広重や日本画について語っている。このことから、彼は直接的な日本美術の接触によって1930年までに日本美術に関心を持つようになっていたと考えられる¹³。

一方、日本建築について触れる機会はあったのだろうか。管見では直接的に彼が日本建築について見聞きしたと記す文献は見当たらない。しかしながら、ノイトラは第一次世界大戦中に日本建築を想起させる注目すべき事績を残している。第一次世界大戦勃発直後の1914年にバルカン半島へと出征したノイトラは、その道程で「将校の茶室 Officer's Tea House」（1915年）（図4）を設計している。

この茶室は無装飾の平坦な面と柱と梁で構成され、壁から露出した柱は背後の白壁によって強調されている。そして一定の連続する柱によって、視覚的な規則性が表現されている。ニューヨーク近代美術館の建築デザイン部門のアーサー・ドレクスラーが指摘したように、この茶室にみられる表現は桂離宮のような日本の伝統的な建築の視覚的特質と共通する¹⁴。この共通性は、ノイトラの日本受容について考察するうえで注目される。ノイトラはこの時点では、まだ日本建築に関する知識を十分に持っていなかったと考えられるが、彼の最初の実作となるこの茶室は、日本建築の特徴に近接していたのである。

ノイトラは1930年の来日を振り返って、「私は（中略）日本からの最初の招待を受けとってそこに到着したとき、突然、まるで我が家に帰ってきたかのように感じた¹⁵」と述べている。当然、ノイトラにとって日本は異国の地であるはずであった。ところがノイトラは異国の地という感覚よりも、むしろ日本に対する強い親近感を抱いていた

図1：馬と蛇（1915）

図2：自画像（1917）

図3：風景画（1918）

図4：将校の茶室（1915）

という。ウィーンのジャポニスムとライトの日本趣味という二重の契機によって育まれた感性は、来日直後のノイトラに日本に対する親近感を抱かせるに至ったと考えられる¹⁶。来日までの日本芸術との接触が直接的、間接的のいずれであったにせよ、ノイトラは日本に対する高い関心と強い親近感を持って日本を受容することになったと考えられる。

3. 来日：日本の特質の探求

先述のとおり、ノイトラは1930年にCIAMのアメリカ代表として出席するためにブリュッセルへと向かい、その旅の途中で日本に立ち寄っている。ノイトラは、ライトの事務所を知り合った土浦亀城から招待を受けるかたちで、来日したようである。来日時のノイトラは、近代建築に関する講演を行う傍ら、日本建築の視察を精力的に行っている。したがってノイトラの来日には、近代建築の推進と日本の視察という、少なくとも二つの目的があったと考えられる¹⁷。

まずは、当時の建築家としてのノイトラの立脚点を把握するために初来日時の講演内容を検討しておきたい。来日直後のノイトラは、東京で国際建築協会が主催する「新建築の意義と実際」¹⁸と題する講演を行っている。この講演でノイトラは著書『アメリカは如何に建てるか Wie baut Amerika?』や『アメリカ Amerika』で論じた内容を紹介しつつ、来るべき「新建築」について述べている¹⁹。この講演はいわゆる欧米の機能主義の考え方を紹介するものであった。また、日本インターナショナル建築会が主催した「インターナショナル建築」²⁰と題する大阪の講演会では、第2回 CIAM のテーマであった「最小限住宅」の概念を解説し、大衆のための建築をつくるのが将来の建築の指針となると述べ、とくに建築における合理性と衛生面、すなわち空気と光の必要性を強調している²¹。このように当時のノイトラは CIAM 代表としての見解を述べて、その理念の重要性を訴えている²²。ノイトラはこれらの講演を通して、欧州のモダニズムを標榜する立場を鮮明にしているといえる。したがってこの時点では、彼はモダニズムの持つ機能主義の観点から日本を捉えようとしていたと考えられる。

では、ノイトラは日本に何をみて、如何なる評価をしていたのであろうか。ここでは、1930年のノイトラの日本での足跡をたどり、各地に残した感想を考察することにより彼の日本に対する理解について考察していきたい。日本での具体的な視察内容については、翌年1931年のドイツ工作連盟の機関誌『フォルム Die Form』に掲載された、ノイトラによる一連の日本建築に関する記事と写真からその概要をうかがい知ることができる²³。同誌をみる限り、東京では、土浦亀城の自邸、堀口捨己の吉川邸や吉田鉄郎の馬場邸、東京周辺の寺社建築や同潤会アパート、山田守の東京通信省電話局、アントニン・レーモンドによるソビエト大使館など、いわゆる日本のモダニズム建築を中心に見ていたと考えられる。ただし視察時のノイトラは「最近の日本の様式建築についてどう思うか」という質問に対して、「ああジャパニーズクラシックか（中略）あんなものを気にするのはよろしくない」と述べており、様式建築はいくつか見ていたものの、それらには全く関心を持たなかったようである²⁴。

図5：ノイトラによる大阪講演のポスター（1930）

ある²⁴。ノイトラの『フォルム』誌の記事は、当時の日本の建築の動向を伝えることを主眼としているため、そのほかの視察内容については、うかがい知ることができない。しかしながらインターナショナル建築会の活動記録とカリフォルニア大学ロサンゼルス校のアーカイブが所蔵する日本滞在中に描かれたスケッチから、日本でのノイトラの動きを跡づけることができる²⁵。

日本での3度の滞在日程と当時のスケッチの内容をまとめると順に表1と表2のようになる。表1より初来日時にノイトラは東京だけでなく、日光、箱根、鎌倉、京都、奈良、大阪を訪れて、各地で伝統的な建築をみていたことがわかる。つまり、ノイトラは当時の新しい建築以上に、いわゆる伝統的な建築の視察を行っている。表2をみると、日本の人々の日常生活を描くほか、明治神宮では森に佇む社殿を、日光と箱根では町並みを、奈良では東大寺からみた風景などを描いていることがわかる。これらからノイトラの日本特有の生活様式、伝統的な建築や景観、とりわけ畳や和室に対する関心が読みとれる。

前掲の『フォルム』誌の論考では、衣服や生活様式の関係、すなわち和服と畳の上での生活が密接で機能的な関係にあること、そして家具や建具、畳が住宅を支配する規格にもとづき、合理的な関係性が築かれていることに注目している。一方、同誌では、伝統的な建築や

表1：ノイトラの来日時の日程

1930年（昭和5年）		
日時	場所	内容
6月9日	横浜港	横浜港入港
6月10日	東京	東京市内観光 浅草 明治神宮 赤坂にて晩餐
6月11日	東京講演会「新建築の意義と実際」	東京国民新聞社講堂 国際建築協会主催 国民新聞社後援 発起人：土浦亀城 山田守 岸田日出刀 石本喜久治
6月12-13日	日光、箱根	
6月14日	箱根 夜京都着	京都市内見物 都ホテル泊
6月15日	京都	金閣寺 本願寺 嵐山 清水寺 スターバー 本野精吾邸
6月16日	奈良・大阪	興福寺 東大寺 大阪市内見物
6月17日	大阪 新興建築講演会「インターナショナル建築」	大阪市役所 中央市場 今宮アパートメント 大阪城 毎日新聞社講堂 日本インターナショナル建築会主催毎日新聞社 日本建築協会後援
1951年（昭和26年）		
12月10日	グアム島発 羽田着	ロバート・アレグザンダーと共に来日 三日滞在
12月13日	東京講演会「日本の建築家諸君に」	読売ホール 国際建築協会 日本建築学会 読売新聞 三社共同主催
1952年（昭和27年）		
5月9日	京都 京都御所 桂離宮 大徳寺	朝日会館 日本建築協会主催 朝日新聞後援
5月10日	伊勢・奈良	伊勢神宮 東大寺
5月11日	京都	苔寺 竜安寺 孤蓬庵 修学院離宮 銀閣寺 西本願寺 飛雲閣庭園 新京都駅
5月12日	東京	

表2：アーカイブ所蔵の日本旅行のスケッチ

年期および地名	内容	アーカイブ番号
Tokyo 1930	麦わら帽子をかぶった着物姿の男性	1179: box3 #220
untitled	日常的にみられる着物姿の女性	1179: box5 #1083
untitled	子供を背負う女性	1179: box5 #1084
Meiji SHR, Tokio, 1930	明治神宮の鳥居	1179: box5 #1091
untitled	明治神宮本殿	1179: box5 #1092
Osaka 1930	着物姿の女性	1179: box5 #1094
Hakone-Machi-Tokaido 1930 Mikaeri Matsu	見返り松越しにみる箱根の湖と山並	1179: box5 #1102
untitled	上半身大の正面からみた着物姿女性	1179: box5 #1106
Tatami Hakone 1930	和室の畳、床、天井を含む透視図	1179: box5 #1108
Nara	東大寺二月堂からみた家並みか	1179: box5 #1162
Tokondo NARA	五重塔	1179: box5 #1215
Sokothro 1930	海からみた山なみ	Box 1287 #1099
Chuzenji	湖越しに描かれた山なみ	Box 1287 #1208
Nikko 1930	商店街の町並み	Box 1287 #78
Trip on Japan 1930	電車からみた田園風景か	Box 1287 #3
Montery Ginza	書院つき和室で茶をたてる和装女性	Box 376 #466
Later Travel	神社の鳥居と門	Box 1286 #211

景観については言及されていないが、こうした関心については、京都の視察時に残した感想からうかがい知ることができる。京都では、本願寺、清水寺、金閣寺、嵐山などを視察しているが、とりわけ雨の降る嵐山の風景を目にして、ノイトラはつぎのように述べている。

「広重や日本の画が雨の風景を描くのは、日本の風景画が雨のために斯くも一種の美しい趣きを有するからである」²⁶

このようにノイトラは日本特有の景観に関心を示し、自然風景に対する高い感受性が浮世絵や日本画の世界をつくりだしているのだと理解している。同時に、ここにはノイトラの日本人の風景に対する美意識への共感がうかがえる。さらに夕暮れの清水寺では、建築全体と自然の風景の調和に感嘆し、これを高く評価している²⁷。以上のような日本の自然風景や建築的景観に対する評価は、ノイトラが日本の風景の美しさ、そして、その風景と建築が調和する様子を日本の注目すべき特質として理解していたことを示している。

初来日時のノイトラの関心については、晩年に書かれた自伝『ライフ・アンド・シェイプ Life and Shape』で明確に述べられている。

「金持ちと貧しい人、都市に住む裕福な人と農民、彼らは皆、空間次元においては、畳や障子、簾、作りつけの引き出しにもとづく、同じ尺度を基準としていた。細やかな部分の仕上げ、細工はシンプルで規格に合っており、驚くほど美しい仕事を見せている。それらには本当に基本となる関連性が明らかに存在している！私はこれら全てのものを求めて努力していた。そして、私はもはやひとりではないのだ。」²⁸

ここでは日本の簾・畳・建具などにみられる規格統一と、その技術力と芸術性が評価されている²⁹。さらに、これら日本の標準化にみられる特質があらゆる階層の人々に適用されていることが、とりわけ高く評価されている。

このようなノイトラの積極的な日本に対する評価には理由があったと思われる。ノイトラが参画していた CIAM は 1920 年代後半を通して、住宅の不足と住環境の改善を目的として万人のための建築空間をつくるための設計手法を探索していた³⁰。標準化と合理化は 1927 年のラ・サラ宣言で最初に掲げられた項目であり、ノイトラが関心を寄せていた項目でもあった。ノイトラは欧州の探索していた設計手法が日本の伝統的建築に内在していること、そして、それらが日本人の生活に役立つ手だてとして用いられ、日本に根づいていることを感じ取ったがために、このような日本に多大な関心と共感を寄せたのであろう。換言するならば、ノイトラは欧州のモダニズム建築の志向と日本の伝統にみる特徴の共通性に注目し、その共通性ゆえに日本に対する高い評価をしたと思われる。ノイトラは日本の特質の探索を通して、みずから目指す建築の方向性に対して確信を深めることになったと考えられる。

一方で、ノイトラは自伝のなかで、つぎのようにも述べている。

「どんより曇ったある朝、我々は横浜に到着した。(中略) 当時、東京と大阪は、現在の大きさの四分の一しかなく、京都は人が触れた事がないかのよう、古の状態を保っていた。すべてが私自身のこれまでの環境と信じられないくらい違っていた。だが、空間と自然の扱いについての私の感覚にとっては、すべてがとても近かった。」³¹

このように初めての来日で、ノイトラは日本の「空間と自然の扱い」に対して親近感を覚えていたという³²。ここでいう「空間と自然の扱い」とは、京都に残した感想と合わせて判断するならば、日本の風景と建物の調和の妙を指しているものと考えられる。また、このノイトラの日本に対する親近感は、日本を欧州の機能主義の文脈で捉えるだけでなく、ノイトラ自身の建築観を基準にして述べたものと考え

られる。ノイトラが日本に対して抱いた共感は、機能主義では捉えきれない彼の建築観を知るための手がかりとなろう。日本の「空間と自然の扱い」に関しては、再来日及び再々来日の講演内容にうかがうことができるが、初来日以後の発表論文や著書において、具体的な論考の対象として幾度も取り上げられるため、以下で論ずることとする。

4. 来日後：初来日後の論考にみる日本

帰国後のノイトラは個人住宅を多く手がけると同時に、アメリカ合衆国住宅局のコサソルタントとしても活動していた。彼はその活動の一環として、論文「今日の国内状況 The Domestic Setting Today」³³を発表し、自己の住宅生産に対する見解を述べている。ノイトラは論文の冒頭で、アメリカの「工業化の新しい状況」を前提として、住宅生産のためには標準化を推し進めるべきだと説いている³⁴。そして、その標準化に対する主張の正当性を論じるにあたって、ノイトラはつぎのように日本の住宅を引き合いに出している。

『たとえば、日本の住宅建設において、美しさや魅力的な多様性は、基本となる寸法と材料の何千年にもわたる標準化によって、損なわれることは全くなかったのである。』³⁵

標準化を進めるうえで問題となるのは、住宅が無味乾燥な画一化へ向かうことへの危惧であった。ノイトラは日本の標準化を例にとることによって、その危惧を取り除こうとしている。彼は、美的要素と多様性を失うことなく展開した標準化の具体例が、日本にあると考えていた。つまり来日後のノイトラにとって日本の標準化にみた特質は、アメリカの工業化住宅の生産の実現可能性を示すうえで、参考にすべき事例となっていたのである。

一方、この論文では、日本の標準化の特質とは別に、日本の住宅の庭について言及している点が注目される。ノイトラは日本の住宅の庭にどのような特質をみていたのであろうか。ここで、ノイトラは今後のアメリカの住宅建設に要求される基本原理を三つ挙げている³⁶。それは、1) 外部とのより親密な関係、2) 空間の快適性と経済性の組み合わせ、3) 清潔さに対する備えである。ノイトラはこの第一項に関する記述の冒頭で、つぎのように述べている。

「現代のテクノロジーは住宅の内側に、自然で快適な戸外の状況をつくることができる。同時に、居住地の周囲の庭園空間は飾りとしてだけでなく、本当に快適な生活圏となるに違いない。伝統的な日本住宅の事例は、ごく小さな裏庭でさえも居住者の近くに普遍的な自然の魅力や多くの清涼剤をもたらすということを示している。」³⁷

このようにノイトラは「外部とのより親密な関係」を築くものとして庭に注目し、庭のもつ意義を再考している。ノイトラはそれまで飾りとして存在していた庭は、現代のテクノロジーの進歩によって、眺められるためだけでなく、生活のための空間になると捉えている³⁸。そして、生活のための空間としての庭の具体的な意味を、日本の住宅の庭にみているのである。ここでは、伝統的な日本の小さな裏庭は自然と居住者を近づける装置として認識され、また、庭は小さくとも居住者を回復させる清涼剤として機能するものと理解されている。このことから、ノイトラが日本の住宅の庭にみたものは、物理的に外部空間を取りこむことによって人間に与えられる心理的効果というべきものであったことがわかる。

ノイトラが「外部空間とのより親密な関係」を築くもののひとつとして庭に注目し、その具体的な意味を日本の庭に見出していたことを考えるならば、日本の住宅の庭に見出した特質が、当時のノイトラ

の住宅に関わる建築理念と共通していたと考えることができる。

さらに、その後の著書にもノイトラの日本の住宅の庭への言及を見出すことができる。1951年の著書『敷地の神秘と現実 Mystery and Realities of the Site³⁹⁾』において、自然景観を重視したデザインを論じるなかで、以前と異なる観点から日本の住宅の庭に対する理解を示している。ここでノイトラは「日本の伝統的な都市」にある住宅では、「宝石のような宇宙や理想的な景観の断片が小さな裏庭で巧みにとらえられている」と述べている⁴⁰⁾。以前と同様に日本の裏庭に着目しているが、ここでは、宇宙や景観といった建物の周囲に存在する空間的な広がりを感じさせる何らかの断片が巧みにとらえていることに對して評価がされている。

では、なぜこうした評価に至ったのであろうか。ここでは、これ以上、日本の庭についての説明は加えられていないが、この著書が敷地の神秘性を積極的に取り込もうとする姿勢を打ち出したものであることを考えると、日本の庭に対する評価の意味が了解されてくる。すなわち、ノイトラにとって「建物は敷地の持つ精神性を共有しなければならない⁴¹⁾」ものであったことを考えるとき、日本の庭は、敷地の持つ精神を「巧みに」汲み取ったものとして評価されていたとみることができる。このような、建物が存在する敷地の持つ精神性を共有しなければならないという意識を、ノイトラは以前から基本的な姿勢として持っていたようである。同論文でノイトラは、これまでの自分の建築に対する姿勢について、つぎのように述べている。

「現代建築は、特殊で地域的な環境の多様性に無関心で、機械化や標準化されるものとして進攻してきた。しかし私はいつも問題となる個別の特質に多くの魅力を感じ、鼓舞されてきたのである」⁴²⁾

ここに示されるように、ノイトラが常に地域的な環境の特質に対して注意を払っていたことを考え合わせるならば、彼の日本の住宅の庭に対する評価は、建物が敷地のもつ特質を汲み取っていなければならないという彼の建築理念に基づいていたと考えられる。

また、こうしたノイトラの建築に対する姿勢に関連して、その他にもノイトラが日本に共感した例をみつけることができる。彼は日本建築協会が主催する「自然に帰れ⁴³⁾」と題する講演のなかで、日本の自然の捉え方に注目して、つぎのように述べている。

「日本は自然を愛し、その美しさを保持しつづけたところの世界にも稀な国のひとつであります。神社や寺院などすべて自然環境のうちに置かれています。お国では、どんな子供でも滝や山などを眺め、自然の美しさを味わっております。幼いときから自然に親しみ、自然を楽しんでくらすよう訓練されております。建築家が、自然と生活とを融和せしめねばならぬということは、ここに事新しく説くまでもありません。」⁴⁴⁾

ここで述べられるのは、今後の建築家に求められる姿勢についてである。建築家は自然と生活を親しい関係にしてゆくべき存在であるという考えを論じるにあたって、日本の人々が古くから自然に親しむ生活を保持してきたことに注目している。換言するならば、ノイトラは日本という地域の文化的特徴のひとつを日本の自然の捉え方に見出しているといえる。このような日本の自然の捉え方はノイトラ自身の自然の捉え方と同じものと認識しているばかりか、建築を思考するうえで重視すべき姿勢だと説いている⁴⁵⁾。したがって、ノイトラにとって日本の伝統にみられる自然観は、共感という意識を超えて、来日後の彼の建築観の意義や実現可能性を思考するうえで、参照すべき対象としての重要な役割を担っていたと考えられる。ノイトラが日本に見たものは、彼の建築観の具体的な展開だったのではないだろうか。

ノイトラの日本に対する共感とは、初来日の1930年から1950年代初頭まで保持されていたことがうかがえるが、それまで日本の影響については明言されることはなかった。しかし、1951年の再来日時「日本の建築家諸君に」と題した講演で、ノイトラは日本から受けた影響について、つぎのように述べている。

「日本の古いりっぱな歴史は、わたくしの建築作品をつくる上に非常に参考になっております。(中略)日本の優れた風景がわたくしにいかにつよく印象づけたかをお話したいと思います。じっさいそれはわたくしの建築観に強い影響を与えております。」⁴⁶⁾

ここで注目されるのは、ノイトラが日本を参考にしてしていると述べるだけでなく、日本が彼の建築観に強い影響を与えていると認識している点である。このことは、初来日以降のノイトラにとって日本の影響が大きかったこと、そしてその影響は彼の建築観においてこそ、みられることを伝えている。

彼の建築観に与えた日本の影響については、同講演のなかで、日本は風景や自然に対する尊敬の念を伝統的に保持してきたこと、標準化や空間の融通性が伝統的に成立していること、そして日常生活と建築が渾然一体となっていることを挙げている⁴⁷⁾。これらは初来日時に注目した内容と同じものである。しかしこの講演では、こうした日本の誇るべき伝統は継承されるべきであると付け加えている点が注目される。これまでみてきたように、日本の伝統的な要素こそが、来日を通じて彼が理解を示してきたものであった。

日本に言及したノイトラの言説を合わせてみると、彼が来日を通じて受容したものは、日本の外観上の意匠ではなく、日本の伝統にみられる合理性や機能性、そして自然の扱い方にあったといえることができる。換言するならば、ノイトラは日本の造形の背後にある抽象的性格を理解し、受容していたといえる⁴⁸⁾。来日後のノイトラの作品に一見して日本的な意匠を認めるのが困難なのは、こうした理由からであろう。逆に、ノイトラが日本から受容したものは、日本の造形の抽象的性格であったがゆえに、表面的な造形ではなく、建築観に影響を与えたと考えられるのである。

5. おわりに

以上、来日前、来日時、来日後に分けて、ノイトラの日本に対する関心の所在を中心に考察した。来日前には、ウィーンのジャポニスムとライトの日本趣味を通して日本受容の素地を育み、これらは来日時のノイトラに、日本に対する親近感をもたらしたと思われる。その後、実際に来日することによって、実体験に基づいた理解が進められた。来日を通してノイトラが日本に関心を示した点は、日本の伝統的な建築にみられる標準化の有効性、自然と建築の関係にみる親近性、そして生活と建築の合理的な関係性であった。来日後には、自身の建築観を論じるうえで、日本の住宅にみられる敷地への配慮や自然の扱い方に言及していた。したがってノイトラは日本を理解する過程で日本の造形意匠の形式性にとらわれるのではなく、日本の造形の合理性や機能性に加えて、精神性とも言うべきものを受容していたといえる。日本の造形の抽象的性格が彼の建築観に影響を与えていたのである。

また、ノイトラが日本にみた特質、すなわち地域固有の自然環境や敷地への呼応、そして伝統的な歴史や文化を汲み取ろうとする姿勢は、地域主義と共通するものである。このノイトラの地域主義的展開については、更なる検証が必要であるが、これを単なる転向と考える

だけでは不十分であると思われる。ノイトラの地域主義的展開は、彼の日本に対する評価や理解を考え合わせることによって、より明確に理解されるのではないだろうか。すなわち最新のテクノロジーへの依拠を前提とする態度は、モダニズムの機能主義や合理主義理論によるものとみることができるが、地域の伝統や自然と建築の関係性を抽出し、継承しようとする姿勢は、欧州に由来するモダニズムの理論に基づくというよりも、日本の特質を自己の建築観と照らし合わせて理解した結果に基づく側面が大きかったと考えられる。それゆえに、ノイトラにとって日本は大きな意味を持ちえたと考えられるのである。

謝辞 本稿をまとめるにあたり、京都工芸繊維大学教授、石田潤一郎先生にご教示を賜りました。そして同校助手、笠原一人先生から貴重な史料の提供とご助言を賜りました。また、カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授のトーマス・ハインズ (Thomas S. Hines) 先生には多くのご教示をいただきました。ここに記して、感謝の意を表します。

註

- 1 *Modern Architecture: International Exhibition*, The Museum of Modern Art, New York, 1932.
- 2 Arthur Drexler and Thomas S. Hines, *The Architecture of Richard Neutra: From International Style to California Modern*, The Museum of Modern Art, New York, 1982; Thomas S. Hines, *Richard Neutra and the Search for Modern Architecture*, Oxford University Press, 1982.
- 3 Dietrich Neumann edit., *Richard Neutra's Windshield House*, Harvard University Graduate School of Design, Harvard University Art Museums; Yale University Press, 2001; Stephen Leet, *Richard Neutra's Miller House*, Princeton Architectural Press, 2004; Sylvia Lavin, *Form Follows Libido: Architecture and Richard Neutra in a Psychoanalytic Culture*, MIT Press, 2005.
- 4 Alexander Tzonis, Lianne Lefaivre and Bruno Stagno, *Tropical Architecture, Critical Regionalism in the Age of Globalization*, Wiley-Academy, 2001, pp.35-40 Kenneth Frampton, *Modern Architecture: a critical history*, Thames and Hudson, revised edition, 1985, p.319. 中村敏男訳『現代建築史』青土社 2003, p.551.
- 5 ノイトラと日本の関係について言及した既往研究としては Clay Lancaster, *Japanese Influence in America*, W. H. Rawls, 1963 や田中厚子「南カリフォルニアにおける日本建築の影響と引き戸の導入」『建築史の回り舞台—時代とデザインを語る』彰国社 1999 などがある。
- 6 本稿は 2004 年度日本建築学会大会にて発表した論文「リチャード・ノイトラの建築観と日本」にもとに、新たな知見を加えて書き改めたものである。本稿の考察にあたって、当時の建築系の雑誌や新聞、カリフォルニア大学ロサンゼルス校のノイトラ・アーカイブ (University of California, Los Angeles, Charles E. Young Library, Special Collection, Neutra Papers) に所蔵されている日本旅行時のスケッチやスクラップなどの資料収集と閲覧を行った。
- 7 上野伊三郎「ノイトラ氏を迎えて」『建築と社会』1952 年 7 月 pp.30-31
- 8 上野によれば、ロースは「日本古文化の大的愛好者」であったという。前掲、上野伊三郎「ノイトラ氏を迎えて」『建築と社会』1952 年 7 月 pp.30-31 最近の研究では、ロースが 1927 年までに建築の未来を考えるうえで、日本建築に注目していたことが明らかにされている。クラウディア・デランク、水藤龍彦・池田祐子訳『ドイツにおける〈日本=倭〉』思文閣出版 2004, p.182
- 9 当時のウィーンの芸術に触れる機会を与えたのは、彼の姉ジョセフィーネ (Josefine Neutra) であった。ジョセフィーネは芸術家であり、その夫は美術館学芸員かつ美術史家であった。彼らはウィーンの芸術家たちに精通していただけでなく、ノイトラとウィーンの先進的な芸術サークルへの橋渡しをしていた。彼らはノイトラにウィーン分離派の芸術家たち、特にエゴン・シーレ、オスカー・ココシュカ、グスタフ・クリムトのアトリエを訪ねる機会まで提供していた。Thomas S. Hines, *op. cit.*, p.13
- 10 Foreword by Neutra, Heinz Gertesegger & Max Peintner, *Otto Wagner, 1841-1918*, Pall Mall Press, 1970; ノイトラはウィーン世紀末芸術の状況を語るなかでクリムトを賞賛していたと述べている。
- 11 小川信子、田中厚子著『ビッグ・リトル・ノブ: ライトの弟子・女性建築家土浦信子』ドメス出版 2001、ジュリア・ミーチ「フランク・ロイド・ライトと日本美術」『アメリカのジャポニズム展国際シンポジウム』世田谷美術館 1991, p.30
- 12 Julia Meech, *Frank Lloyd Wright and the Art of Japan*, Japan Society: Harry N. Abrams, 2001
- 13 上野伊三郎「ノイトラ氏」『インターナショナル建築』1930 年 8 月 p.15
- 14 Arthur Drexler and Thomas S. Hines, *op. cit.*, p.51 ニューヨーク近代美術館の学芸員であったドレクスラーはこの作品に日本の建築デザインとの共通性を見ている。それは日本の茶室に見られる繊細な柱梁の構造や桂離宮に見られる柱の規則的なリズムの表現性であった。
- 15 David H. Engel, *Japanese Gardens for Today*, with a foreword by Richard Neutra, C.E. Tuttle, 1959
- 16 ヨハネス・ヴィーニンガー「我々は日本人から何を学ぶのか—日本の芸術と 1900 年前後のウィーン」『ウィーン世紀末』セゾン美術館 1989 p.449
- 17 「建築美術の研究に來朝ノイトラ教授」『横浜毎日新報』1930 年 6 月 10 日
- 18 ノイトラ「新建築の意義と実際」『国際建築』1930 年 7 月 pp.2-3
- 19 Neutra, *Wie baut Amerika?: Gegenwärtige Bauarbeit Amerikanischer Kreis*, Stuttgart: Hoffmann, 1927; *Amerika: Die Stilbildung des Neuen Bauens in den Vereinigten Staaten*, Wien: Schroll, 1930
- 20 「大衆の手でいい家を多く作れ ノイトラ氏説く」『大阪毎日新聞』1930 年 6 月 18 日。ノイトラは 1930 年に日本インターナショナル建築会の国際会員に名を連ねている。
- 21 *Ibid.*, p.9
- 22 “Neutra Finds Our Skyscrapers Deny City Place in the Sunshine”, *New York Evening Post*, January 12, 1931
- 23 Neutra, *Gegenwärtige Bauarbeit in Japan, Die Form*, 1931, Heft 1, pp.22-28; *Japanische Wohnung. Ableitung. Schwierigkeiten, Die Form*, 1931, Heft 3, pp.92-97; *Neue Architektur in Japan, Die Form*, Heft 9, 1931, pp.333-340
- 24 中尾保「ノイトラ氏と語る」『インターナショナル建築』1930 年 8 月 p.16
- 25 『インターナショナル建築』1930 年 8 月の編集後記「雑感」にノイトラの来日時の言動がまとめて記述されている。
- 26 上野伊三郎「ノイトラ氏」『インターナショナル建築』1930 年 8 月 p.15
- 27 *Ibid.*
- 28 Neutra, *Life and Shape*, Appleton-Century-Crofts, 1962, p.228
- 29 この点については、1931 年の『フォルム』誌上で発表された論文でも同一のことを語っていた。Neutra, *Japanische Wohnung. Ableitung. Schwierigkeiten, Die Form*, 1931, Heft 3, pp.92-97
- 30 前稿にてノイトラの規格化に関して日本住宅に言及していたことについて論じた。玉田浩之、石田潤一郎「リチャード・ノイトラの初期住宅作品における設計手法について—1920 年代及び 30 年代の実験的工業化住宅を中心として—」日本建築学会計画系論文集 No. 587, pp.235-241, 2005 年 1 月
- 31 Neutra, *Life and Shape*, Appleton-Century-Crofts, 1962, p.227. ノイトラの来日時の感想と興味の対象は概して一貫しており、この自伝の言説は彼の日本への関心の高さと持続性を物語っている。ただし、日本の「空間と自然」に関する直接的な言及は、後述するように 1940 年代に入ってからである。
- 32 ここで述べられるノイトラの所感、横浜に到着した時のことであることから 1930 年の初来日時を回想したものと考えられる。
- 33 Neutra, *The Domestic Setting Today, Art in American Life and Education*, National Society for Study on Education, Forth Year Book, 1941, pp.57-63
- 34 ノイトラは活動初期から、テクノロジーを活かす事を念頭においていた。玉田浩之、石田潤一郎「1920 年代および 30 年代のリチャード・ノイトラの建築思想におけるテクノロジーについて」日本建築学会計画系論文集 No. 574, pp.209-215, 2003 年 12 月
- 35 *Ibid.*, p.58
- 36 Neutra, *The Domestic Setting Today, Art in American Life and Education*, National Society for Study on Education, Forth Year Book, 1941, p.59
- 37 *Ibid.*, p.59
- 38 これは戦後に南カリフォルニアで広まる「アウトドア・リビング」に連なる考え方である。1940 年代の地域的な展開として見られるひとつの特質ともいえる。たとえば、以下の文献を参照されたい。Modern is Regional, *House and Garden*, March 1941, pp.35-37
- 39 Neutra, *Mystery and Realities of the Site*, Morgan & Morgan, 1951
- 40 *Ibid.*, p.56
- 41 Neutra, *The Significance of the Setting, Architectural Review*, December 1949, p.58
- 42 *Ibid.*
- 43 ノイトラ「自然に帰れ」『建築と社会』1952 年 7 月 第 33 巻 pp.24-28
- 44 *Ibid.*
- 45 この日本の自然観に対する注目は前掲の「フォルム」誌において、既に報告されていた。そこでノイトラが着目した点は、日本人の立ち居振る舞いと建築の関係であった。初来日時のノイトラが建造物だけでなく、日常生活を営む人物を熱心に描いていることからその関心の高さがうかがえる。Neutra, *Japanische Wohnung. Ableitung. Schwierigkeiten, Die Form*, 1931, Heft 3, pp.92-97. また日本人の生活にみる穏やかな振る舞いと「軽い構造と薄い皮膜」による住宅との間には合理的な関係があるとみていた。すなわちノイトラは日本人の生活と住宅との関係に合理的な関連性を見出し、これを高く評価していたのである。この点は以下の文献に詳しい。Neutra, *Sound and Smell of Architecture, Progressive Architecture*, November 1949, pp.65-66 「建築の音とにおい」『国際建築』第 17 巻 第 4 号 1950 年 10 月 pp.7-9
- 46 ノイトラ「リチャード・ノイトラ：日本の建築家諸君に」『国際建築』1952 年 2 月 pp.52-55.
- 47 *Ibid.*
- 48 上野伊三郎はのちに「彼等 (ノイトラの所属した奥独機能主義グループ) はこれ (日本古美術) を精神的に取り入れて、外形上の模倣に陥らなかった」『建築と社会』1952 年 7 月 p.31 と指摘している。この指摘は、当時の日本の建築思潮との関連から考慮されるべき点があるが、ノイトラが日本美術に関心を持つウィーンの集団から出発し、その後日本の造形を模倣せず精神的に取り入れた事実は、彼の日本受容のあり方を理解するうえで注目される。

図版出典 図 1: Arthur Drexler and Thomas S. Hines, *The Architecture of Richard Neutra*, Museum of Modern Art, New York, 1982, p.17; 図 2: *Ibid.*, p.24; 図 3: Thomas S. Hines, *Richard Neutra and the Search for Modern Architecture*, Oxford University Press, 1982, p.16; 図 4: *Ibid.*, p.24; 図 5: *Die Form*, 1931 Heft.1, p.22

(2005 年 7 月 8 日原稿受理, 2005 年 10 月 14 日採用決定)